



宮城県中学校長会

会 報



平成26年度前期の活動を振り返って

宮城県中学校長会

会 長 菅 原 義 明

平成26年も、残すところあとわずかとなりました。師走の声とともに、各中学校では、進路指導で忙しい日々を送っていることと思います。また、校長先生方には、今年度の教育課程実施状況の途中評価や、次年度構想などで、気の休まる暇もないというのが本音ではないでしょうか。

宮城県中学校長会のこれまでを振り返りますと、6月の総会で確認した「発信・提言・行動する校長会」という新たな決意のもと、順調に活動を進めてきたと評価しております。

福島市を会場に開催された第64回東北地区中学校長会研究協議会では、教育の今日的課題についての研究協議や、本県を含む被災3県の現状についての意見交換など、大きな収穫が得られました。特に、「健やかな身体の育成を図る教育の充実」という研究題のもと、優れた実践を発表された栗原地区校長会の皆様に改めて感謝申し上げます。

10月に開催された全日中研究協議会苦小牧大会には、本県から37名の校長先生方が参加し、全国の校長先生方との意見交流や情報交換など、実り多いものとなりました。

さらに、目を見張るような快晴の下、蔵王町で行われた第33回宮城県中学校長会研究協議会大河原大会は、仙台市中学校長会との初めての分離開催となりましたが、主管された大河原地区校長会の温かく緻密なご配慮と、参加した会員の皆様の学校経営に向けた熱い思いにより、大成功のうちに終了しました。

これらの大会に加えて、本年度は、平成28年度に仙台市での開催が決まっている全日本中学校長会研究協議会宮城大会に向けた企画・準備と、宮

城県中学校長会創立70周年記念事業の準備が本格的に動き始めました。双方とも、宮城県と仙台市の中学校長会の緊密な連携・協力のもと、彷彿とはありますが、形が見えつつあるところですが、今後も皆様のお力をお借りすることになります。東日本大震災後に、全日本中学校長会をはじめ、全国の校長先生方からいただいた多くのご支援に応える意味で、また力強く復興と再生の道を歩み続けている本県教育の姿を発信する意味で、準備万端怠りなく進めていきたいと考えております。

一方、国の動向に目を向けてみますと、中央教育審議会では、小中一貫教育の制度化や教員養成・採用・研修の在り方等についての諮問を受け、審議が進んでいます。さらに、関係省庁間では教員定数の見直し等も議論の対象になっており、現場を預かる校長として、緊張感をもって議論の行方を見守っていく必要があります。県中学校長会としても、全日中理事会などの機会を通して現場の実情を訴え、震災復興加配措置の継続やスクールカウンセラーの増員等、具体的要望を含みながら国への働きかけの一翼を担っていきたいと思います。

学校施設等の整備状況を見ると、本県教育の再生は満足できる段階には至っていないようにも感じられます。しかし、子ども達の学ぶ意欲は色あせることはありません。それに応えるべく、今日の、そして未来の学校づくりへのリーダーシップを持ち続けたいと思います。年度末までの期間、宮城県中学校長会としての課題意識を忘れず、次年度に繋がるよう活動を推進してまいりますので、よろしくお願いいたします。

第65回 全日本中学校長会研究協議会 苫小牧大会

研究協議会主題：「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え
社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」
苫小牧市総合体育館他 平成26年10月8日(水)～10日(金)

第65回全日本中学校長会研究協議会北海道（苫小牧）大会が10月8日～10日の3日間、苫小牧市総合体育館を中心に苫小牧市内の各会場で開催された。大会には、全国から2,054名の会員が参加し、「自立と共生 夢をはぐくむ北の大地 氷都苫小牧から」を大会スローガンに、熱心な研究討議が展開された。

第1日 10月8日 (水)

全日中常任理事会、全日中理事会
全体協議運営委員会、分科会運営委員会

第2日 10月9日 (木)

【開会式】

松岡敬明大会会長が「現行指導要領の実施3年目となり、順調にその成果がみられている。また、全日中ビジョンに掲げた「確かな学力」をはじめ、中学校教育の充実、発展に精力的に取り組んできた成果も上がっている。同一主題での大会が3年目であり、集大成として、これからの中学校教育の向上につながるものであることを期待したい」と挨拶した。

続いて、吉田俊樹大会実行委員長が、「『未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育』という研究協議会主題を踏まえ、全国の中学校長の英知と創意を結集し、我が国中学校教育の一層の充実発展を期待したい」と挨拶した。

祝辞が文部科学大臣、北海道知事、苫小牧市長、北海道教育委員会教育長の4名からあった。



【文部科学省説明】

文部科学審議官前川喜平氏から、①現行の学習指導要領の下に実施されている教育課程の方向性について「特別な教科・道徳」「英語教育の充実」②学習指導要領の改訂に向けた動きについて～英語と道徳 ③土曜授業について ④教育再生の実

行に向けた教職員指導體制の整備「チーム学校」「教員定数改善計画」⑤生活指導について「いじめ防止対策」「不登校」の5点について説明があった。

【全体協議会】

<第1研究協議題：全日中提案>

全日中生徒指導部長直田益明氏から、「学校からの教育改革～生徒指導部の調査研究報告書を通して～」と題し、生徒指導部の調査研究に基づいた課題と提言があった。

<第2研究協議題：地区提案>

三重県津市立久居西中学校長西村哲二氏から「学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実～精神科医と連携した学校メンタルヘルス活動の推進～」との題で提案があり、この取組が不登校の改善等に効果が見られているとのことであった。

第3日 10月10日 (金)

【全体会】

大会実行委員長より「大会宣言・決議（案）」が提案され、承認された。

【記念講演】

北海道増毛町出身である、世界的なフランス料理のシェフの三國清三氏の「地産地消と食育について～味覚は心と気持ちを豊かにする～」と題する講演が行われた。

自らの幼少期からの話からはじまり、苦み・甘み・酸味・塩味の四味に、「うま味」を加えた「五味」を身につけることで人を思いやる気持ちが育つ、幼少期から味覚を育てなければならぬと語った。海外の「味覚授業」、「スロー・フード活動」等とも連携し、現在、保育園や幼稚園、小学校でご自身が取り組んでいる食育活動を紹介され、世界遺産に登録された“和食”を大切にしていきたい、と熱い思いを話された。

【閉会式】

大会会長と大会実行委員長から御礼の挨拶に続き、次期開催地である福岡県から、福岡県の紹介と挨拶があった。最後に、福岡県から参加した75名全員の校長先生方がステージ前で来年度の参加をアピールし、3日間の大会が終了した。

(岩沼市立玉浦中学校長 横 橋 健)

第1分科会に参加して

「創意工夫を生かした特色ある 教育課程の編成・実施」

記録：大崎市立岩出山中学校長 吉田 和子

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 共に学び、高め合う授業（協同学習）を目指して～ことばの力を育む「コミュニケーション・トレーニング（コミトレ）」を大切にしながら～

「コミトレ」で培った力を基盤に、「協同学習」を授業改善の柱として学力の向上をめざした教育活動の実践（和歌山県）

- (2) 「知力・体力・忍耐力」のさらなる向上を目指して～ともに夢を語り、ともに感動を～先輩校長の学校改革を継承・発展させ、「二学期制」の特長と小規模校のメリットを生かした特色ある取組（奈良県）

2 実践の概要

- (1) 和歌山県紀美野町立美里中学校の実践

- ① 「ことばの力」の向上を図るコミュニケーション・トレーニングの継続的な実施
・「書く」「聞く」「話す」「複合型」の4領域の問題を、朝や終学活に全校一斉で週2回、年間約50回実施

- ② 「協同学習」を取り入れた、主体的な学びを促す授業改善の工夫

- (2) 奈良県曾爾村立曾爾中学校の実践

- ① 地域の伝統文化に触れる豊かな体験活動「ふるさとタイム」の創設

- ・全校縦割りによる総合学習
- ・職場体験学習、老人福祉施設訪問等

- ② 他機関と連携した「学力向上」の取組

- ・奈良教育大学生による学習支援
- ・少年自然の家での全校学力向上合宿
- ・小学校との合同体育大会

- ③ 授業時数の増加と生徒の学習意欲の向上をめざす二学期制の実施

3 全日中からの指導助言

両校ともに全日中教育ビジョン提言1「確かな学力：一人一人の意欲を引き出す授業の創造」の具現化であり、学校長の強いリーダーシップの下で小規模校の特色を生かし、生徒・教職員双方に感動と気概をもたらす特色ある教育課程の編成・実践により、大きな成果を上げている。

第2分科会に参加して

「確かな学力の定着を 図る指導と評価」

記録：南三陸町立志津川中学校長 佐藤 正幸

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 学ぶ意欲を高める授業改善の在り方と家庭学習環境づくり（宮城県・日南市）

- (2) 志を持ち確かな学力を身に付け、たくましく生きる子どもを育てる小・中連携の取組（福岡・広川町）

2 実践の概要

- (1) 宮城県日南市立北郷中学校の実践

- ① 校長による学力向上プランの策定
- ② 校内研究の推進
- ③ 家庭等との連携

- (2) 福岡県八乙女郡広川町立広川中学校の実践
小中で連携し学力向上のために以下の3つの取組を行った。

- ① 確かな学力を向上させる取組
- ② 家庭学習力を向上させる取組
- ③ 学習意欲を向上させる取組

3 全日中からの指導助言

いずれも校長がリーダーシップを発揮し、研究の方向性を明確に示し、組織的・体系的な実践が行われていた。

宮崎県の発表では、校長が「学力向上プラン」の中で授業改善の視点を示し、小中一貫校の特色を生かした校内研修で内容を深め、授業参観でその検証を行うという体系化された実践であった。

福岡県の発表では、町内の4つの学校の校長が結束し、町をあげて学力向上に取り組み、小中合同研修による授業改善、保護者と連携した家庭学習力の向上、学習意欲を向上させるための9か年間のキャリア教育の推進など、校長の学校経営姿勢が明確に示された報告であった。



第3分科会に参加して

「社会性豊かな心を育む 道徳教育の充実」

記録：色麻町立色麻中学校長 鎌田 稔

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 豊かな心を育て、共に未来を切り拓く道徳教育の推進
道徳教育推進のための取組と道徳の時間と他の教育活動との関連や日常的に家庭・地域社会との交流を考えた取組 (香川県)
- (2) 創意工夫を生かした特色ある道徳教育の推進
地域密着型の道徳教育の工夫と道徳ノートや副読本を効果的に活用した心に響く道徳教育の実践 (愛媛県)

2 実践の概要・内容

- (1) 香川県土庄町立土庄中学校の実践
 - ① 指導過程や指導方法を工夫したり、実践授業後の分析やまとめを継続して行う。
 - ② 道徳の時間と各教科や総合的な学習の時間、特別活動との関連を重視し、有機的なつながりを明確にする。
 - ③ 家族や地域社会に対して連携を図るための取組を行い、共通理解を深める。
- (2) 愛媛県松山市立拓南中学校の実践
 - ① 教育目標の設定と研究組織の構築
 - ② 特色ある道徳教育指導計画の改善と活用
 - ③ 道徳教育の「要」としての道徳の時間の工夫・充実
 - ・地域教材の活用と魅力的な資料の開発
 - ・地元の優れた人材をゲストティーチャーに迎えた授業
 - ④ 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の推進

3 全日中からの指導助言

両発表とも、校長のリーダーシップの下、教職員、生徒ともに道徳の時間への肯定的意識が向上した取組である。また、多様な道徳教材の工夫を行い、地域への関心の高まり、豊かな心とふるさとへの愛情や思いを高めることのできた実践事例であった。



第4分科会に参加して

「健やかな体の育成を図る 教育の充実」

記録：登米市立佐沼中学校長 大内 俊吾

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 家庭、地域、関係機関等の連携を図った教育の充実 (石川県)
- (2) 生徒達が健康な生活を送るために (三重県)

2 実践の概要

- (1) 石川県の実践
朝食の実態調査に基づいた、行政・PTA及び行政区が連動した組織的な食育に関する組織を立ち上げ、組織的・計画的な取組を行っている。
・栄養教諭による生徒・保護者・地域社会への【食育講演会】等の啓発活動の取組
・教科・部活動・生徒会委員会活動の諸場面での食育の取組
- (2) 三重県の実践
体力の向上を図る体育・スポーツ活動と規律の確保
・保健体育科での「集団行動」を徹底させる取組
・学校行事「全校マラソン大会」の取組
・食への関心、親への感謝、自己肯定感を育む生徒の手による「お弁当の日」(年3回)の取組

3 研究協議

- (1) 望ましい食習慣に係る三者一体となった組織的な食育推進活動例が紹介された。実態調査に基づき課題を明らかにして、より実践的な活動が展開されており大いに参考となった。今後は校種を超えた取組、生徒主体の活動へどう展開させるのか等が課題として指摘された。
- (2) 生徒指導上の学校経営課題解決を「健康維持の観点」から切り込んだ実践例であった。意図が明確であり、規律指導が徹底して展開されていること、一方では「お弁当の日」を設定し生徒の自己肯定感を育てていることから、硬軟のバランスのとれた取組であった。他方、生徒指導上の諸課題と健康教育との関連の理論的整合の説明が不十分でもあった。両県とも大いに参考になった発表であった。

第5分科会に参加して

「自らの生き方を考え主体的に
進路を選択する指導の充実」

記録：石巻市立門脇中学校長 山田 元郎

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 日常の教育活動の中で行うキャリア教育の充実を目指す学校経営の在り方 (青森県)
- (2) 生徒の実態に応じ、マネジメント・サイクルの視点を生かしたキャリア教育の改善と充実 (秋田県)

2 実践の概要

- (1) 青森県青森市立油川中学校の実践
市内中学校のキャリア教育への取組に関する調査結果を分析することから得られた課題について、学校が日常の教育活動で創るキャリア教育の在り方とそれに関わる校長の役割を明らかにしようとして取り組んだ実践である。

キャリアノートは、児童生徒の振り返りのみならず、教師にとっても学習の足跡を知る資料となり、学年や校種が変わっても継続した指導に結び付けることにも有効なことが上げられている。

- (2) 秋田県大曲仙北校長会の実践
各校が行っているキャリア教育を「生徒の実態を踏まえたキャリア教育」の視点から見直すとともに、P D C Aサイクルからも見直している。

各段階の課題を解決していくことを通してキャリア教育の改善と充実のための校長の関わり方を探りながら、成果を明らかにしている。キャリア教育の育てたい力を明確にし、P D C Aサイクルに取り組むことによって成果が表れた学校も増加しているアンケート項目の作成やP D C Aの手法、小学校との関連等、参考になる実践である。

3 全日中からの指導助言

両発表とも、キャリア教育の改善と充実に向けた示唆に富む研究実践、そして多くの貴重な資料と情報をいただいた。

校長のリーダーシップの下、研究や豊かな体験活動を含めた教育活動の実践を通して学習環境づくりと授業改善を意図的・計画的・組織的に推進した結果、教職員の意識が向上し、学校が活性化し、大きな成果をあげた素晴らしい事例である。

第6分科会に参加して

「学校生活に適応し豊かな
学校生活を築く指導の充実」

記録：栗原市立瀬峰中学校長 菅原 至

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 夢を育み、生きる力を身に付けた生徒の育成を目指して
学校運営の見直しと改善を通して生徒の自己指導力を育成する (茨城県)
- (2) 家庭・地域・関係機関と連携した生徒指導の充実
小中や家庭・地域・関係機関との連携を通して生徒指導の充実を図る (山梨県)

2 実践の概要

- (1) 茨城県古河市立総和北中学校の実践
 - ① 夢を語る生徒の育成
 - ・生き方を学ぶ (JAXA 筑波の見学と講演等)
 - ・社会を知る (JICA 調査員による国際交流・国際理解等)
 - ② 学力向上と全教職員で取り組む指導体制づくり
 - ・教科を超えた全教職員での授業研究の実施
 - ③ 小中連携、家庭・地域との連携の充実
 - ・総和北中学校区小中連携連絡協議会の開催
- (2) 山梨県大月市の3つの市立中学校の実践
 - ① 小中連携 ~小菅中学校の実践~
 - ・教科の課題について情報交換、授業参観
 - ・小学校での中学校教員によるT T授業等
 - ② 家庭や地域と連携した自己肯定感の育成 ~富浜中学校の実践~
 - ・地域で2日間の職場体験、駅の清掃活動
 - ・家庭の教育力向上を目指した保護者学習会の開催等
 - ③ 学校応援団の設立 ~大月第一中学校の実践~
 - ・学習支援部会の開催 (課外活動への協力)
 - ・体験学習支援部会の開催 (農業体験への支援)

3 まとめ

両発表ともに生徒数の減少や学校統合が進んでいる地域にある中学校である。生徒の実態を踏まえながら地域や小中連携等を進め、校内指導体制を見直し「学校生活への適応」や「豊かな学校生活を築く」効果的な試みが行われていた。

第7分科会に参加して

「教師力の向上を目指した 研修の充実」

記録：多賀城市立東豊中学校長 鈴木 朝二

1 テーマ及び提案の趣旨

(1) 高い使命感と確かな力量を持った教員の育成～人材育成の構造化を目指して～

(広島県)

(2) 確かな学力の育成を通じた校長の取組

(山口県)

2 実践の概要

(1) 広島市立温品中学校の実践

① すべての教員がミドルリーダーとして成長できるように、人材育成の手順を構造化する人材育成研究構造図を作成。

② 目指すミドルリーダー像、経験年数（5年以下、15年以下、16年以上）の教員の求められる資質・能力を明確化し、具体的な年間研修計画を設定・実施する。

③ 夏季休業日を2週間短縮、土曜授業等も導入し、教科指導力、生徒指導力、組織調整能力、危機管理能力を身に付ける研修等の実施を可能にしている。

(2) 山口県美祢市立於福中学校の実践

① 全市内中学校教員へのアンケートから、授業改善、公開授業のニーズを引き出す。

② 校長の視点として「同僚性」（教師が互いに学び合う協働システムとして）を育成。

③ ベテラン教師がメンターとなり、指示や命令によらず、メンティと対話により気づきと助言によるメンタリングを確立する。

3 全日中からの指導助言

2つの発表は、全日中教育ビジョン提言1の趣旨に沿った実践であり、「教師力の向上を目指した研修の充実の重要性」を明らかにした実践である。また、校長の強いリーダーシップと教職員を生かすマネジメント力が発揮され、成果をあげている報告である。

第8分科会に参加して

「時代の要請に応える 学校経営の充実」

記録：白石市立福岡中学校 阿部 誠

1 テーマ及び提案の趣旨

(1) 特別支援教育の推進体制の整備と保護者の啓発

通常の学級に在籍する特別な教育支援の必要な生徒の増加による推進に向けた取組

(北海道旭川市)

(2) 学校改善を効果的に進める学校評価の在り方と校長の役割行動

(北海道留萌管内)

学校改善に向けた学校評価システムへの校長の働きかけ（役割行動）に視点を置いての取組

2 実践の概要

(1) 旭川市立旭川第二中学校の実践

① 旭川市中学校長会の定例会における研修

② 特別支援教育に関わるアンケートの実施

③ 旭川特別支援学級設置学校長協会との連携

④ 「旭川版すくらむ」を活用した実践

(2) 北海道苫前町立苫前中学校の実践

① 具体的で焦点化された学校経営の重点提示

② 生徒の状況を把握するための短いスパンでの評価の実施

③ 教師の意識を変える評価の取組

④ 学校関係者評価を効果的に活用し改善に生かす取組

3 まとめ

(1) 特別支援教育の推進において、保護者と学校、関係機関が子どものよさや課題について共通理解を図り、育ちと学びを応援・支援していくための方策が示された。

(2) 校長の働きかけに視点を置き、課題に対する取組の重点化を図り、それに対する緻密で意図的な評価計画と実践が重要であることが示された。

第33回 宮城県中学校長会研究協議会 大河原大会



第33回宮城県中学校長会研究協議会大河原大会が「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」の大会主題の下、10月30日、蔵王町ふるさと文化会館（ございんホール）で開催されました。

開会行事は、小室秀一大会実行委員長の開会宣言の後、菅原義明宮城県中学校長会長が「宮城県中学校長会は震災からの復旧・復興、そして再生と長い困難な道のりを歩んできましたが、宮城の教育が確実に以前の姿を取り戻し、より高みを求めて一步一步前進しているのは会員各位の努力の賜である。」との感謝の言葉から始まり、続けて「本大会も第33回を迎えましたが、今回は初めての仙台市との分離開催となり、主管地区としてご尽力いただきました大河原地区校長会の皆さんの熱い思いに支えられ、記念すべき大会が蔵王町で開催できますことを会員とともに喜び合いたい。校長自らが率先して研修に取り組んでこそ、職員の研修意欲も増進し、学校の一層の活性化が図られる。」と挨拶しました。また、「今年度は、東北地区中学校長会研究協議会福島大会において、栗原地区に発表をいただいたことに感謝、次年度福岡県で開催の全日本中学校長会研究協議会では登米地区校長会が健康・体力の向上をテーマとして発表を行う予定ですので応援していきたい。積極的な研究協議をお願いしたい。」と挨拶しました。

次に、記念講演では、佐藤純子大会副実行委員長が講師紹介を行い、講師の蔵王町教育委員会教

育総務課文化財保護係長の佐藤洋一氏が長年蔵王町の郷土史の研究に取り組み、中でも仙台真田氏に着目、どのような歴史的運命をたどってきたかについて研究をされており、平成28年度NHK大河ドラマに決定した「真田丸」のドラマ化にも大きく貢献されていることを紹介しました。佐藤氏からは「白石刈田地区に根付いた真田幸村公の血脈」と題してご講演をいただきました。内容の一部を紹介します。

「文化財保護の仕事は昔のことを伝え、文化財の大切さを後世に残していく重要な仕事。理解者を育てて歴史が豊かな誇れる町にしたい。4年前に『仙台真田物語』を作成し配布したところ急に蔵王町と真田幸村の関係について関心が高まった。昨今は戦国BASARAなどで戦国武将ブーム。中でも真田幸村は歴史の表に出ない謎だらけの人生。実際どのような人なのか？関心を持つ人が多い。宮城仙台では、30年前の大河ドラマ『独眼竜政宗』以来の歴史ブームになっている。真田幸村公と蔵王町のゆかりは戦国武将の真田幸村が大坂夏の陣の戦いで討死した。徳川を脅かすその見事な戦いぶりから『日の本一の兵』と評価され歴史に名を刻んだ。大坂城落城とともに絶えたと思われていた真田幸村の血脈であったが、次男・大八は伊達政宗に匿われて密かに養育され、大八の息子が真田を名乗って蔵王町に根付いた。真田の郷・蔵王を広める意味は地域の活気と誇り。大河ドラマ『(仙台)真田丸』は大きなチャンス、一つの通過点としたい。」

閉式では、小畑幸彦大会副会長が「壮大な歴史秘話に彩られた真田幸村公の血脈とゆかりの地の講演」への御礼と本大会の開催にあたり準備や運営に当たっていただいた大河原管内の皆さん、蔵王町教育委員会、関係各位への御礼を述べ、来年度は第34回宮城県中学校長会研究協議会仙台大会が岩沼市で開催されることを報告し全体会の閉式の挨拶としました。

(大崎市立古川中学校長 星 豪)

研究題 心身共に健やかな生徒を地域全体で育む教育の充実 (栗原地区)

第1分科会に参加して

栗原市立築館中学校長 原 吉 宏

1 はじめに

本分科会は、①研究発表、②研究に関連した各地区的実践報告、③発表者から本実践についての課題報告、④課題解決に向けた各地区からの提言、という流れで協議を深めた。

2 研究発表

研究のねらいを、起業教育の実践を通して、地域と学校をつなぐ仕組み作りと、豊かな人間性や社会性を育み健やかな身体の育成や健全な精神を持つ生徒の育成とした。

生徒サイドの具体的な取組は、①個人での商品企画、②4～10人の会社「栗駒ドリームカンパニー」の設立、③会社組織作り、④商品企画、⑤試作品展示、⑥本製作、⑦販売である。商品企画や試作品段階で商工会からのアドバイスや起業教育推進委員の品評会を受けたり、一迫商業高校出前授業を受講したりした上で商品の本製作、販売となる。この取組を通して生徒は、自己の適性・能力等を踏まえた生き方を意識するようになり、人とのかかわりを通し支え合う喜び、信頼や自信を持つことができた。また、問題解決や探究活動に主体的に取り組む姿勢が生まれ、地域に貢献したい思いが高まってきた。課題として、商品開発の苦労やプレッシャーが大きいことが挙げられた。これらの成果と課題を踏まえ、「地域サポート活動計画」を策定し、地域人材の活用や地域貢献の推進と、再編校としての新たな校風づくりを目的に、総合学習における地域人材の活用と部活単位での地区活動(防災・緑化等)参加を2本柱にして取り組んだ。



3 各地区の実践報告

- (1) 志教育研究指定を受け小中高の連携で生活、学習のきまりを共通化し実践。(鳴瀬未来中)
- (2) 地域の復興市への参加、昨年度は3学年、今年度は日程調整し各学年参加予定。生徒の製品は親や祖父母等がすぐ購入し完売するが売れ残ることで次につながることもある。

(志津川中)

- (3) シイタケ栽培・販売活動。生徒に活気。

(円田中)

4 本実践に取り組んでの課題

- (1) 生徒製品の購入者は保護者や祖父母が多いが一般の方も購入。
- (2) 専門的知識・技能を持つ指導者の確保が難しい(特に震災以降)。外部に人材バンクがなく講師探しを学校が担っている現状。
- (3) 行政からの財政面での下支えが必要。製作過程が重要ということは言うまでもないが、予算がないところでよい製品はできない。
- (4) 教育課程や運営面での課題は、地域の「秋の市」と学校文化祭を1日ずらして実施。準備時数も大幅に増加。
- (5) 地域と学校をつなぐ組織が必要。再編校として再編前の活動を継続。文化祭における再編前のふるさと学習の発表では、衣装や物品等の準備・借用が多岐にわたった。地域連携の充実が学校の多忙化につながる心配がある。

5 課題解決に向けた各地区からの提言

- (1) 村田町では社教主事が機能しており職場体験では企業一覧表が準備され、農業体験では電話1本で地域人材が派遣。(村田二中)
- (2) 田代島の獅子舞は昨年保存会の補助で復活したが、指導者も震災で分散。保存会と協議し、やれることをやっていくことで一致。生徒は有志で20～30人集まった。できる範囲で行うことが継続につながる。(石巻中)
- (3) 戸倉中と再編。郷土芸能の継承は放課後実施。戸倉の生徒だけでなく参加。(志津川中)
- (4) 修学旅行で地域PR活動として雀踊りを紹介。経費のかかる活動から転換。ねらいをはずさなければ負担ない方向を目指すことも重要。(岩出山中)
- (5) 家庭の教育力が低下している中、再編校として学校から地域へ発信することが必要。再編前の活動を絶やさないことも地域連携に重要。(栗駒中)

6 おわりに

各校での心身共に健やかな生徒の育成に向け、発表校の貴重な実践の成果と課題を参加者全員で共有できたこと、各地区の実践状況等について情報交換できたことは、今後の確かな学校経営の推進に向け大いに参考になった。

研究題 「体力の」 向上や健康の増進を図る体育・スポーツ活動の充実 (登米地区)

第2分科会に参加して

登米市立南方中学校長 三浦 秀治

1 はじめに

全国的に子どもの体力低下が問題になっているが、宮城県も同様で、その背景には、食習慣や就寝時刻等の生活様式の変化が大きく影響していると思われる。

厚生労働省の都道府県別の肥満及び主な生活習慣の状況によると、宮城県の20～69歳の男性の肥満度については全国でワースト6位。20歳以上の男性の歩数平均値がワースト8位、現在習慣的に喫煙している者の割合がワースト8位。飲酒習慣者の割合が8位である。

登米市においては、公共交通機関の不便さから近距離にも自動車を使うという習慣が、体力低下に影響している。普段の日常生活が、自分の足を使わないことが当たり前になっている。そのことについても教職員を含めた登米市の大人全体が、問題意識をもっていない。

児童生徒についても、少子化による小学校の学校統合が進み、統合した小学校では、スクールバスで通うことも多く、徒歩や自転車で通う児童が減少している。中学生についても天候に左右されるが車での送迎等が、児童生徒の体力向上や健康の保持増進の阻害要因になっているのではないかという心配があり、「可能な限り徒歩・自転車通学できないか」と考えて登米市校長会から話題提供と研究協議を行った。

2 話題提供の概要

- 大人と生徒の宮城県の昨年度 体力面データ紹介 (国調査から)
- 登米市の生徒の体力データ (県の調査から)
- 登米市 A 中の「保健体育通信」学習シート
- 新田小・中のゲーム機の利用アンケート
- 新田中の「スマホ等アンケート」
- ノーテレビ・ノーゲームデイの具体例紹介



3 各地区の取組及び意見交換

(1) 体力の向上について

視点1 保健体育科の授業改善と学校全体で取り組む体力向上への取組

視点2 部活動の充実

新月中 (気仙沼市)

- ・新月中でも新入生の体力向上が課題。肥満度の高い生徒の改善を図りたい。
- ・ライン等の使用状況の具体的データは貴重。

南中 (白石中)

- ・運動の得意な生徒と不得意な生徒の2極

化、粘りがきかない生徒が多いのが持久走等の結果に結びつくと考え。

- ・どのような場面で負荷が効果的であるかを吟味し年間を通しての取組にすれば良い。

桃生中 (石巻市)

- ・体力面で保護者の危機感がなく、朝の全校トレーニングなどは保護者の反対が想定される。
- ・過去には、全校持久走など行われていたので、保護者を啓発し全校体制で取り組みたい。

- 冬場のトレーニングの登米市アンケート結果サーキットトレーニング・部活動対抗駅伝等。

塩竈二中 (塩竈市)

- ・体力面を校長会で取り上げるのは画期的。
- ・体力でのデータは、「子どもと大人との関係」をもっと関連させてよりよいものに。
- ・肥満対策として体育の授業を生かすために、授業改善は、有効。データを取り継続を。校長会でも有効。
- ・食育面では、アレルギー対応も話題にしたい。

- (2) 「健康の保持増進 (肥満解消に焦点) について

視点3 食育に焦点をあてた健康教育

視点4 生活習慣の見直し

七ヶ浜中 (仙台)

- ・虫歯の罹患率が高い。歯磨きタイムの説明を。

- 中学生は部活等で歯医者に行けない。小学校で歯磨きを学校で行っている。給食の後片付け前に行う。全校で中学校でも行っている。(登米中)

槻木中 (大河原)

- ・小学校で習慣付けされているので、環境を整えれば習慣が続く。中1の肥満が多い。連携が重要。

- データを登米市の小学校長に示し、意識改革。肥満は、スクールバスの影響。機会あるごと、保護者に肥満の実態を説明。地域の力も借用。青葉中 (石巻市)

- ・「早寝・早起き・朝ご飯」の意識調査が必要。
- ・部活動の5分間は、走らせる。体力向上に有効。
- ・業間マラソンとマウスピースの有効性確認等。

4 おわりに

参加者の意見を整理すると、一つ一つ具体的な取組を挙げていて良いが、市全体として統一的なものになればと感じた。次年度の東北大会の発表を期待したい。

この研修から地域を大切に、校長自身の判断力が必要であると認識した。

研究題 時代の要請に応える学校経営の充実(本吉地区)

第3分科会に参加して

石巻市立河南東中学校長 山田晴彦

1 はじめに

全日中第3分科会研究協議題「時代の要請に応える学校経営の充実」を受け、「東日本大震災から学んだこと～明日への提言～」という研究テーマのもと、本吉地区中学校長会からの提言について研究協議を行った。

2 研究課題・提言の概要

(1) 研究のねらい

東日本大震災における本吉地区の学校の状態とその後の対応から、今後の防災体制や防災教育に役立てるための提言をまとめ、発表する。

(2) 提言

《提言1》 学区内の防災環境を定期的に確かめて、防災対応能力を高める

【海拔表示プロジェクト】

- ・学区内の電柱に海拔表示を地域住民と取り付けた。(中学生を復興の担い手に)
- ・表示板の維持管理を通し、災害の教訓を風化させずに後世に伝承していく。

《提言2》 複数の避難場所を考え、どこでも状況に応じた判断ができるようにする

- ・想定を超えた津波が押し寄せたが、急遽避難場所を変更し難を逃れた学校があったことを踏まえ、複数の避難場所を設定し、幼小中学校と地域住民が合同で避難訓練を実施している。
- ・津波の浸水域をマップ上へ記入し、通学路上の避難場所を生徒・保護者で共通理解している。



《提言3》 学校再開を視野に入れて、避難場所を開設し初期運営できる用意をする

- ・地域の班長、支援者、役場職員、学校職員で、班長会議を実施し、安全で衛生的な避難所運営に努めた経験を生かす。

《提言4》 学校と家庭や地域との共同体制を確立する。

- ・生徒の避難所運営訓練を消防署員の指導の下、少年防災クラブとして実施する。

3 おわりに

東日本大震災の経験を生かし、当時の学校状況の把握とともに、今後の防災体制や防災教育について、本吉地区中学校長会より貴重な提言をしていただいた。

今後は、「明日への提言」を伝えること、特に、学校現場では、次世代の管理職にしっかり伝えていくことが大切であると考えます。

また、各学校の地理的状况により、「地震・津波」の他に、「火山噴火」「洪水」「土砂災害」「石油化学コンビナート事故」「原子力発電所事故」等の災害への対応に関して、マニュアルを整備し、避難訓練を継続することで、それらの災害への防災・減災について、防災教育とともに準備しておく必要があることを強く感じた。

平成26年度

宮城県中学校長会事務局

〒981-1224

名取市増田字柳田 230

名取市立増田中学校内

TEL 022-384-8062

FAX 022-384-8063

E-mail: miyagi-kochokai@wine.plala.or.jp

郵便振替 2240-1-41664

事務局員：佐々木 美代子

根本 恭子